

東海岸

メルローズにて

インターンシップ

交流記

加納由美子

東海岸メルローズにて

インターシップ交流部

加納 由美子 (かのう・ゆみこ)

1959年 神戸市生まれ
1980年 関西外国語短期大学米英語学科卒業
1980～87年 東京海上火災株式会社勤務
1987～88年 スクール・インターンシップ・プログラムによりアメリカ滞在
1988年～ ハワイ・パシフィック・カレッジに留学中

平成元年 1月25日 初版発行 《検印省略》
平成元年 3月20日 4版発行 略称—メルローズ

東海岸メルローズにて
—インターンシップ交流記—

著 者 加 納 由 美 子
発行者 簗 豊

発行所 株式会社 同 信 社
東京都千代田区神田神保町 1—41

発売所 同文館出版株式会社
東京都千代田区神田神保町 1—41 〒101
電話(東京) 294—1801～6 振替東京 0—42935

© Y. Kano
Printed in Japan 1989

印刷：唯 真
製本：トキワ製本

ISBN4-495-97421-1

1 旅立ち

酸欠の脳みそに風を……………

2

きっかけ／2

選考会／5

青い鳥？／6

決心／10

ローガン空港まで……………

12

アメリカのどこへ／12

スライド作り／14

ホストスクールとホストファミリーからの手紙／16

大忙しの出発前／21

海を渡って／23

2 暮らしてみれば

巨人の国？

一・二倍のガリバー／26

車／27

ショッピングモールとスーパーマーケット／28

レストラン／29

家／30

家の中にあるもの／31

大きくないもの／34

車は靴のようなもの

歩かない人達／35

車がないハンディ／37

ボディーのへこんだ車／39

乗ってしまえば／40

まばらな足跡／42

車以外の足

ボストンの公共交通機関事情——コミュニタールейル／43

ある朝の体験／45

何もない駅／47

バス／49

地下鉄／50

タクシー／52

FOOD・FOOD

四倍の肉と五分の一の魚／54

家庭でよく使われる調理の方法／57

黄色くて分厚いぎょうざの皮／59

too-fishy——魚くさ／60

食事は簡単に／61

お酒の話／65

お箸でダイエットできる？／68

ダイエットは丁のついた死……………

69

二種類のコマーシャル／69

食習慣の変化／71

なぜかアイスクリームは山盛り／73

ガーフィールドの人気の秘密／76

キッチン考……………

78

ナイフと庖丁／78

小皿／80

デイスポーザーとディッシュウォッシャー／80

丸めてポイ／83

ハンカチは高くつくか／85

シャワーとお風呂……………

87

はずせないシャワーヘッド／87

ゆっくりできないアメリカ式／89

「足の裏」と「境界線」……………

92

ボーイフレンドの両親に足を向けてもOK／92

靴で歩くところと靴をぬいで歩くところ／95

「境界線」のいろいろ／98

カタカナ英語・ローマ字英語

変装に惑わされて／102

日本人が英語の聞きとりに苦勞する理由^{ワケ}／104

「手足生える」／105

今の中学生も同じ目に？／108

チャイニーズ・スター

「チャイニーズ」は「オリエンタル」と同義語？／110

先生達もつい「チャイニーズ」／113

遠景／116

3 アメリカ人達

客は待つもの

行儀よく列に並ぶアメリカ人／120

並ばないですむ工夫／123

人件費が原因／125

個人主義

「私が悪いのではない」／129

久しぶりの「お客様」／131

「この私」の判断で／132

個人主義は利己主義ではない／133

個人としての自分の発言／134

デイケアセンター

疑問／137

女性もゴールを／141

ママとパパ以外の世界／143

小学校に入るまでは／144

親がどう接するか／145

フリーマンさんの話／146

日本のクレイマー夫妻達は／	150
解放された男達……………	152

料理や買物をする男性達／	152
次なる世代／	158
なぜ料理をする男性が多いか／	160
女性の解放度／	162
アメリカもまた過渡期に／	164

4 小 学 校

メルローズの小学校……………	168
一日のスケジュール——八時二十分から二時三十分まで／	168

教室／	170
オフィス／	171
授業時間とリセス／	173
午 後／	175

授業内容／	176
算 数／	177
社会科／	178
道 徳／	179
保 健／	181
コンピュータの利用／	183
スペシャルエデュケーション／	184
学校委員会／	186
小人数クラス、小規模学校／	187
P T O／	189
薄給の先生達／	193
誘拐事件多発の影響／	197
M E T C O／	198
H A P P Y な子供達………	202
学校は子供達がH A P P Y であるべき場所／	202
創造性の前提／	209

付録

さかさまブーブー.....214

あとがき.....219

1

旅
立
ち



酸欠の脳みそに風を

▼ きっかけ

八六年の二月のこと、新聞でインターンシップについての記事を見たのがことの始まり。それによると、インターンシップは外国で学校を訪問して日本のことを紹介するという文化教育プログラムで、訪問先はアメリカ、イギリス、カナダなど七カ国、期間は一カ月から九カ月。十月出発の第十五期の参加者を募集中で参加資格は特にないという。

興味をひかれてその記事を切り抜いたものの、それはしばらく机の上に置いたままだった。一週間やそこらの旅行ではなく、外国で少なくとも半年ぐらい暮らしてみたいという気持ちはずっとあった。でも留学となるとちょっとたいへんだし、だいいち何をわざわざ

外国で勉強したいのか目的がなかった。その点このプログラムは期間も短いし、草の根の国際交流ということで地域に入りこめるから、「生活してみたい」私の希望にはピッタリだった。しかし実際にこれに参加するとなると、勤めている会社を辞めなければいけない。

短大卒業後、会社勤めを始めてその時点ではぼまる六年。勤務先の会社はいわゆる一流企業で給料がよいことで知られている。といっても、もっと給料のよいところはいくらでもあるし、四年制大学卒業者と短大卒業者では仕事の内容も給料も全然違うのだが、それでも悪くないことはたしかだった。

私の仕事の内容はいわゆる一般事務で、営業部門の社内的な仕事だった。少しずつ変わりつつあるとはいえ、女性社員が社外に対して自分の名前で責任を持ってできる仕事はごく限られた事務的なことで、女性社員には名刺がいらないということがそれを示している。しかし、事務であろうと社内的であろうとどっちでもいいような仕事はない。幸い人間関係にはとても恵まれていたし、会社の一員というよりは、自分のいる部署の一員であることにある程度充実感があった。しかし、特に忙しいときには家に帰ると新聞を読む時間もないぐらいだったにもかかわらず、物理的な忙しさとはうらはらに、どこかに死ぬほど退屈している部分があった。友達とお酒を飲んでおしゃべりをしたり買物をしたりして自分をだましだまし目をそらせてきたけれど、だんだんそれがごまかしにくくなってき

ていた。心底熱中できるものがない欲求不満というやつだ。何かおもしろいことはないかと雑誌などを見ても、ノリきれなくて後味がよけいに悪い。スキーに行くと相気が晴れたけれど、シーズンが限られているし、そう何度も休暇をとって行けるものではない。「七年目の浮気」ではないが、六年も同じことをしていると、ホントに好きなことでなければ何もかもマンネリになってウンザリしてくるのだ。

とにかくインターンシップの資料を取り寄せてみることにした。送られてきた資料によると、インターンシップというのはアメリカ・ワシントン州の認可公益法人で、八七年が活動八年目。参加者には何をしなければいけないという具体的な義務はなく、自作のスライド、習字、折紙、そろばんなど日本について紹介する手段は各人に任されている。受け入れる学校側は、参加者の滞在家庭を確保してくれる。費用は参加者が実費、つまり各自の渡航費や保険料などとプログラムの運営費を負担し、滞在先の家庭に食費の一部として月一五〇ドルを払う。それ以外のお金のやりとりはない。

過去に参加した人には「人生観が変わった」という人もいるという。見たことのない風景だけに囲まれて、酸欠の脳みそに風を入れよう。申し込みをして選考を受けることにした。

▼ 選 考 会

五月のある日、インターンシップの選考会があった。集まった人は女性のほうが多く、年代的には大学生らしき年代とそれ以降の二十代が多かったが、三十代、四十代、なかには定年後と思われる人もいた。選考は英語と一般常識の筆記試験と面接で、筆記試験には「子供の日」を英語で外国人に説明するとか、インターンシップに参加すると仮定して、ホストスクールに招待状の返事を書くといった問題もあった。時間があれば「日本」をどういう国として紹介するか自分の見方を書くようになっていた。いくつか簡条書きにして自分の書いたものを見直してみると否定的なものが多くて、肯定的なことを探すのに苦労した。

面接は五人ずつ英語で行なわれ、面接官は外国人と日本人が一人ずつ。一緒に受けた人は、一人はいかにもしっかりした感じで私より二、三歳年上と思われる女性で、あとの三人は大学生か卒業したてぐらいだった。趣味をスキーと読書と書いていたので好きな作家を聞かれ、四、五人の名前を並べたあとで「アンド・ソウ・オン」と言ったら、英語としてはちょっと不自然だったのか、外国人の面接官に「アンド・ソウ・オン氏は有名なんでしょうね」と言われてしまった。